岡田霞船編
伊藤静齋畫

今昔英雄銘々傳 全

明治十三年八月新刊

翰笑堂藏

特59
832

神武天皇

天照大神より
の皇子御母を
太子に立四十
五代鸕鷀草葺不合尊第四
玉依姫天皇十五にして
五にて
日向國に船
軍を起し
筑紫
を平
諸國の戰爭に大敵を破り其后大和
時文
國畝傍
切開て内裏を作り帝位に即在位七
十六年御年一百三十七にて崩ず

特59
832

神武天皇

天照大神より五代鸕鷀草葺不合尊第四の皇子御母を玉依姫天皇十五にして日向國に船太子に立四十五にて

諸國の戰爭に大敵を破り其后大和を平ぐ

開闢て内裏を作り帝位に即在位七十六年御年一百三十七にて崩ず

東京都立中央図書館
東京都立日比谷図書館

綏靖天皇

神武の太子にして御母を蹈鞴五十鈴媛とゝふ大己貴神の孫事代主神の女なり兄君を手研耳命とゝふ神武の時より世を奪はんと謀り賜ひしが事成らず却て綏靖帝の爲に討る綏靖帝位ありて葛城高丘宮に在ます在位三十三御年八十四にて崩したまへぬ

日本武尊

景行天皇の御子にして智すぐれ容貌殊にうるはしく十六歳の時美女の姿になり八十梟師を誅し又東夷を討平けて秩父山に武具を納め賜ふかれより武藏國となる武門の守護神これなり御年三十にて薨ず

大彦命

崇神天皇の時北陸道の大將と成りて出陣の折柄武垣安彦亂を起す大彦命半途より取て返

大和の泉河にて合戰なし安彦を殺し其後北國に下り夷狄を殘らず擊隨へ武名を東かして歸りたまひぬ

畠山重忠

武藏國の人にして智仁勇を兼備す範頼義經と共に平氏を亡ぼす且強力にして單功愛々あり一の谷合戰に我馬を労り自ら春負て嶮岨を下りしと后實朝の世に讒言せられて武州二俣川にて討死す時に四十二

神功皇后

仲哀帝の后にて智勇備はり帝西海の賊を征せらるゝ途中に於て崩ず后喪を發せず自鉞を取て賊を平げ尚不其根を斷んと三韓に渡りて夷賊を服し日本の武威を輝かし筑紫に着岸の時五張の弓を並べ弦を彈じ凱歌を唱へたまふ之より筑紫琴を作るとい

大矢田宿禰

神功皇后の臣下にして勇猛の聞へ高し皇后新羅を擊たまふ時先陣に進んで軍功あり官軍歸朝の後も該地に止まり國政を司どり勇名いよ〳〵高く其後殘賊屢〻蜂起すと雖も竟に降り三韓悉皆大矢田の下知に隨ふ

田原藤太秀郷

武勇八更なり戈智衆に勝れ
年経る百足を退治し
時八真盛と諸共
大ひに戦ひ竟に将門を討取り
勇名いよ〳〵高く
後武蔵下総両國の守護となる

江刀に於て
将門謀叛の

多田満仲

六孫王経基の子にして武門の
棟梁となる〻〻皇基を守護の時
佐言の祈託により摂州に於て大蛇を
射殺し諸民の憂を除き又逆臣
高明を誅し繁延千晴の徒を
破り軍功挙てかぞへ難し
年老て摂州多田院に
隠居し年八十五
にして死す

搦遠保

井手左大臣が後胤にして武勇ならびなく天慶年中に純友逆威を振ひ一時遠保勅命を蒙り伊豫國を守護す純友太宰府の軍破れて再度乱入の時手勢を以て裏敵にあたり竟に賊魁を生捕て大功をあらはす

伊豫守義經

左馬頭義朝の八男にして母九條常盤なり義經幼名を牛若丸といふ吉岡鬼一が元に兵学に達し十二歳の時に熊坂張範以下数人を斬り生長の后平家を西海に亡ぼし智勇天下に聞く然るに兄頼朝と不和を生じ蝦夷地に渡り義經明神となる

源三位頼政

文武に達し弓術に誉れあり二條院御宇鵺とりの怪鳥を射落し天皇の御悩を

いや増清前を賜らる

平治の乱に高倉宮に荷担し戦ひ利あらず竟に宇治に於て自殺す年七十五

小松内大臣重盛

清盛が長男にて忠孝抜群の人なり智仁勇を兼備し平治の乱に信頼義朝らを撃て走らせ軍功屢々なり

父清盛我意に募り且奢りを極む重盛諫止再三に及びて用ひざるを歎き熊野に詣で自死を祈りて死す年四十三

平井保昌

右京大夫致忠の子息なり智
内緣に依て交ハり深し妻ハ
なり保昌嵯峨野に横笛を
袴垂保輔之を
伺ふ保昌
知る
と雖も笛の
音更に変せず
一言の下に保
輔を服させ却つて
金銀を与へて
放ちしとぞ

勇共に備ハり源頼光とハ
和歌に名誉の和泉式部
吹て通行す此時賊首

素戔嗚雄尊

伊弉諾尊の御子
勇猛に在し根の
國に至り
たまふ砌り
出雲國
簸の川
上に於て
八股の大蛇を
退治す後世
此御神を氷川
明神と崇め奉りける

天性

高武蔵守師直

足利尊氏の執權なり其勢ひに於て誰として並ぶ者なし然ハ己れが權威を以て諸家を謗り我意に募り栄耀を極め又ハ主君に抗し暴逆をほしいまゝせしが武運の衰へるに及んでや一族と共に非業の最期を遂げたり

清盛の姪にして大力の勇將なり寿永年間都を落ち源氏に志しを寄する西國武士を討取りの八嶋に於て嗣信を射殺して尚を義經を討んとして能ハず竟に敵兵安徳兄弟を挾みて海中に没す

能登守教經

武内宿禰

孝元帝の子孫にて紀氏の祖なり
神功皇后三韓征伐に八日夜君側を
離れず忠義怠るかり彼の地に
渡りて夷狄を服し
帰國の後ハ忍熊王の
乱を鎮め景行帝より
六代の天皇に仕へ仁徳帝
の時三百七十歳にて薨す

八幡太郎義家

源頼義の嫡男にして智
勇を兼ね
良将なり
弓馬に達し
十六歳の時
に父諸共に
奥州へ下りて
前後十二年の合
強敵を討たぶ
したるが年六十八
戦竟に
美名を末世に残
して死す

巴御前

木曾義仲が愛妾にして力量に於て衆人の知る
所なり且容貌美なり
義仲平家を久利伽羅谷に撃ち
時ハ擲手の大將なり戰場に臨み毎も敵を
破ト雖ざるなり後義仲亡びてより菩提を吊ふ

欠

MISSING

木寺相模坊大塔宮に仕へ吉野の城にあり二階堂出羽入道大軍を以て攻撃急なるに臨み群がる敵を四方に切立血戰數刻に及び敵の首級を獲き

宮の御前に於て舞をなし再度乱軍に切入りて討死す

武藏坊辨慶

出雲の國の産にして幼名鬼若丸と云義經に隨ひ誠忠の臣なり力量に於てハ誰知らざる者なし播磨須磨寺の櫻に制札を建る義經奥羽落の時ハ其身山伏の先達となり安宅の關に冨樫正弘に怪まれしが辯慶即智を以て院宣を逆にして進帳の文に讀なして關門を通る又学キあり

伊東大和守

始め北條に屬せしが王師の起るに及び赤松圓心と倶に官軍と成り忠勤を盡す中國の諸士二心を懷きしに大和守ハ更に心を變せず南朝の忠臣なり

佐藤忠信が子なり兄庄司基春継信と諸共義經に隨ひ忠勇比類なし吉野の雪中に山法師を討滅して洛中に匿る訴人あつて北條討手乱入忠信囲碁を以て碁盤を取て衆兵を悩ます后切腹して死す

常磐駿河守範貞北條高時が一族にして武勇の將なり京都六波羅に在りしが勤王の士諸國に起りてより戦爭止時なし憂を寄手を悩ませ敵兵洛中に入り竟に江刕番場に於て自害す

菊池武光

肥後守武重が男なり
武光を恐怖ずる者なし
の諸將
多く討
死す武
光良懷
親王を征
西將軍と
九州を擊靡かし
勢ひ破竹の如く又大明國へ
使者を遣ハし彼の國王を欺く抔実に名誉の
勇將なり

武勇秀て九州の武士を逆臣尊氏の乱より官軍

畑六郎左衛門親能

新田拾六騎の一人なり曉勇を以て知る
毎も虎丸と号け愛犬
を以て敵陣の虚實
を伺ひ
必ず勝
利
得たりとす中にも
越前黒丸の城を責し時ハ
以て衆敵を破り武名を挙る
寡兵を

後の忠孝を全あす

日野阿波丸

中納言資朝卿の嫡子なり十三の時父君隱謀露顯に因て佐渡に流さる阿若母君の悲歎見るに忍びず辛ふして佐渡に渡り本間入道に乞ふて見んことを望む然れ共北條氏の聞へを恐れて許さず阿若其情無きを怒り夜に紛れて東へとす入道見ず因て手息秀國をバ殺し竹に上りて堀より表に遁れ出

楠正行

正成の長男にして忠孝比類なし父が遺訓を守りて義兵を起し吉野の皇居を守護し足利の大軍を每に智謀を以て破り日夜軍事に心を労し其誠忠父君に劣らず四條縄手の合戰に高師直が大軍を破り賊將を討んとして能はず弟正時と諸共に戰死す

伊賀局

新田の臣篠塚伊賀守貞綱が女なり告野の内裏に仕へ誠忠あり容顔美麗にして勇力あり敵押寄の時帝を始め賀名生の奥へ遁れたまふ折

柄漢川の橋あず局力量を顕し松の大木を倒して諸人を渡せりと

徳川慶喜

聰明英智の君にして西京に在す大政を奉還して坂城に退き再度上洛の際伏見に戦争起る軍破れて江城に入り又東台に謹慎せれ恭順を旨とす其後水戸に退ぞかる朝廷寛大の思召を以て静岡を賜ふ當今遊歩し且閑静を好まるとぞ

武田耕雲齋

水藩にして文武に
炎九郎はとりふ其際
藩士二派に別る耕雲
齋ハ藩籍を脱し
一味の浪士と野州
筑波山に籠り
寄手を憂々
破りしか兵力
尽て加州に
落ち後降りて
刑に處せらる

達す前名跡部

松平容保

奥羽會津の城主なり京都守護の際
諸藩の浪士乱を起す此時
速かに兵を出
して平定な
さしむ其
后慶應
四年正月
伏見の戦爭
より本國に退き官軍に
抗し頗る武勇を顯す後降りて華族に列せらる

大矢内竜五郎
彰義隊の伍長なり
黒門口危ふきに臨み
長劍を閃かして
藤堂の兵を破り
の辺にて単身
縱横して
大兵に
當り
林半藏ふと共に
山内に引揚て后死す

官軍東台を囲み

山下雁鍋

佐藤左武郎
長藩の士にして上野屯集の彰義隊と接戦の折柄
右嚮導にて黒門口へ攻城りが山内の兵も爰を防ぐ
に必死を
究め戦ひしが
左武郎
に於てハ
隊中を
働きし衆人に
抽んで戦ひしが山内より
發砲雨霰の如くなりしも
飛丸の中を進みしが弾丸数ケ所に當りて死す

山岡鐵太郎

幕府の人にして文道に秀で武術に長ず上野戰爭にハ山内より東照宮の御神体を守護して戰場を立退き誠忠をつくす御一新に至りてハ宮内省の大書記官を勤めるる鐵舟先生と称ずるハ此人なり

藤田小四郎

東湖先生の子息なり学ぶ武勇倶に秀で武田正生筑波山籠りー時ハ小四郎ハ一方の大將なり幕府の討手押寄る及び毎真先に進んで数千の大兵を驅悩まー血戰すること屢々なり然れ共弾藥兵糧乏きーより筑波山を

大久保紀伊

幕府の旗下にて大監察なり其性猛勇にして武術に達す上野屯集の彰義隊に入り五月十五日官軍四方を囲みて両軍入乱れて接戦の向黒門破れ天兵山内に充満して山兵一敗の後尚ほ敗兵を鼓舞して其身真先に進み東照大權現と記せし大旗を翻へし大喝一聲して群がる官軍に割て入りしが炮丸額に當りて死

加藤下總

幕府の旗下にして勤仕並寄合なりしが彰義隊に加ハり上野山内に在り五月十五日の戦争一日を保たず山兵散乱に及び加藤主従ハ音羽護國寺の近傍に潜伏してありしが抗後勢に囲まれ進退究まり花々敷一戦して討死す

篠原國幹
鹿児嶋の人にして武勇ハ更なり馬術に達す
上野戦争に
黒門口を破り山内に入り吉祥閣を始め悉皆
烏有に属せしも國幹が計ひなりしと暴發の際ハ先陣の隊長
にて熊本城を囲み陣を轉じて
田原坂に向ひ三月四日吉次越にて戦死す

勝安房
幕府の臣にして博學秀才の人なり官軍関東下向の際ハ一身を拠り東西に
奔走し主君
恭順の赴きを
上申し上下安穏の
御沙汰に至らしむ后
参議に任せらるゝ兼
海軍卿なりしが幾程も無く
して辞職せられる

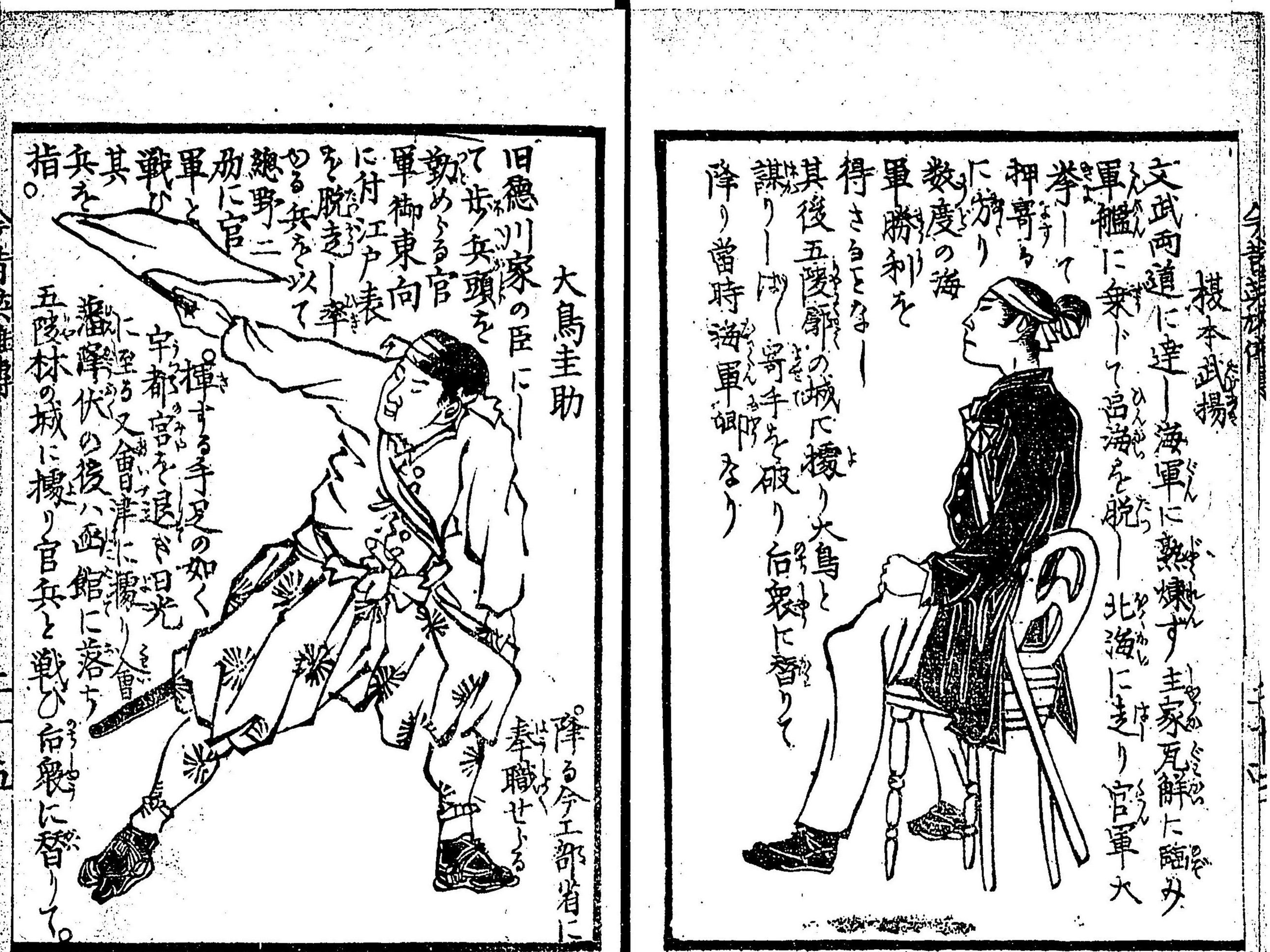
西郷隆盛

薩藩にて勇氣膽力衆に勝れり官軍の参謀として下向し奥羽の戰爭に八臨機の計策當りざるなし

平定の後八参議兼陸軍大將なりしが征韓論の行ハれざるを以て私憤を懷き本國に退きて兵を起し一時八暴威を振ひしも竟に鹿児嶋の城山にて死す

池田太隅

武道に逆へ兵学に秀で主家瓦解の時に及び上野に屯集の彰義隊の大將となり官兵東台を攻撃する當り山内に在て八方指揮を傳へ一時の勇戰怒り敗軍と成り山内を突出して奥羽に落ち磐城平に據り大ひに武名を挙げ



榎本武揚

文武両道に達し海軍に熟練す主家瓦解に臨み軍艦に乗じて呂海を脱し北海に走り官軍大挙して押寄るに防ぎ数度の海軍勝利を得さるなし其後五陵郭の城に據り大鳥と謀り一時寄手を破り后衆に替りて降り當時海軍卿なり

大鳥圭助

旧徳川家の臣にして歩兵頭を勤めらる官軍御東向に付江戸表を脱走し率る兵を以て總野二州に官軍と戦ひ其兵を指揮する手足の如く宇都宮を退き日光に至る又會津に據り會津降伏の後八函館に落ち五陵林の城に據り官兵と戦ひ后衆に替りて降る今工部省に奉職せらる

林　昌之助

上総貝渕にて一万石を領す　徳川家の諸士脱走するの時陣屋を自焼し本國を脱し小田原に至り大久保家と謀り箱根に於て官兵に抗す軍破れて常州に走り再度脱兵を鼓舞して勇戰屢々なり其後仙臺駒ヶ峯に據り諸道の味方に指揮を爲し奥羽一敗の降伏す

桐野利秋

前名中村半次郎とふ智勇共に備はり奥羽の戰爭には大功あり后陸軍少將に任せらる然るに西郷と意を同ふし本國に兵を起し官軍に抗する事数月なりしが寄手の大軍防ぐ能はず隆盛と共に死す

太田万治

備前の藩士にして半大隊の司令官なり

上野戰爭にハ搦手の方に向ひ

根津

團子坂を

擊んと遊奇

隊を率ひて進みしに

彰義隊の

伏兵四方に起りしが万治ハ屈せず必死の勇

戰に敵兵を数人を討取りて切死す

近藤勇

驍勇を以てくに知らるゝ丁卯の冬

大坂に退くに及んで勇ハ諸軍を

率ひて伏見に止まり

師起るに及んで諸

軍を

指揮し又自

から勇戰に

及び銃丸殿に

當りしも屈せ

ず敵中に斬入り

奮戰に及び江戸に歸りて甲州に走り遂に流山にて

捕へらる

徳川將軍

三上留吉

備前の士にて大砲隊の司令官なり

根津惣門内にて彰義隊に囲まれ

頗る難戦に及ぶ

負傷も少しも屈せず爰に必死の勇を奮ひて戦ひしが左右の股に鎗疵を受太刀疵迚も数ヶ所に及びて討死す

小幡兵馬

結城の藩士なり戊辰の役に藩主方向を誤りて脱走す兵馬ハ大義を唱へ同意の者と謀り嗣子を立

結城を守りしが脱兵押寄てより防戦に力を尽せと少兵にして敵せず城中に暦腹して死す

近藤武雄
彰義隊の伍
雲霞の如く
武雄八山外に
薩劫勢に切入り
三橋の元に血
戰なー酒井
ギ助と諸共ニ
切死す

欠

MISSING

重覺院觀覺
佐竹の老臣小野主水が隊
中なり永禪院と心を
合せ毎も長
刀を振て
衆敵を
破り熊
谷助右衛
門を討
取り大功
を現す

市川三左衛門

水戸家の老臣なり戊辰の役方向を誤り藩籍を脱し越後に走り其後暴徒と共に本國を襲ふ軍破れて下総に逃れ成田に匿れあるを捕へられて刑せらる

水禅院徳丈

戊辰の役奥羽の諸藩主師に抗するの際佐竹に於て大義を主張し却て之に抗す此時小野寺主水の隊に在り修験者徳丈ハ寄来る米庄其他の兵と力戦し敵兵中村忠陸を討取

天野八郎

彰義隊の准隊長にて剣道に達す且文戈あり上野戦爭にハ黒門口を守り薩長土の兵攻撃急なるに臨み八郎歩兵を指揮し防戦数刻に及び竟に破れて根岸に落ち三河嶋に至り澤親王に見へ別を告て護國寺に集り其後本所外手町にて捕へられ獄中に死す

松平太郎

幕府の臣なり文武倶に勝れ主家瓦解の際江戸を脱して大鳥〻〻官軍に抗し奥羽一敗の後八丈館に落ち五陵郭に據り再度隊長〻〻なりて寄手を引受大ひに武名を挙られしが榎本大鳥等と倶に降り今聖朝に奉職せり

岸武之助

會藩にて半大隊の長なり官軍大挙して今市驛に迫る

此時武之助ハ寡兵を以て敵に當り且單身縱横して官兵を悩ませしも次第に味方の討ものを見て益々血戰に及び数ヶ所の手疵に進退窮りて切死す

朝比奈弥太郎

水戸家に於て用人なり市川と共に脱走して越後に走り奥羽敗軍に及んで自分残兵を率ひ再度本國に乱入し下総に走りて捕へらるる後厳刑に處せ

平山弥三郎

會藩の士にて武道に長ず官軍進撃の際弥三郎八右嚮道として野州今市にあり上州の兵を喰留んと衆人に抽んで此日味方の續かざるより破れを生じ

難戰数刻に及びて遂に最早是迄なりと戰敵中に突入して切死す此時戌辰の四月廿一日なり

加藤平内

徳川家の臣家にして

勇氣膽力衆に勝れり始め組合銃隊官軍関東下向の總野第一大隊の頭なりしが二朋の間に付江戸を脱して會藩に入て大隊長となり今市驛に出張し薩士の大軍に當り武名をあげる

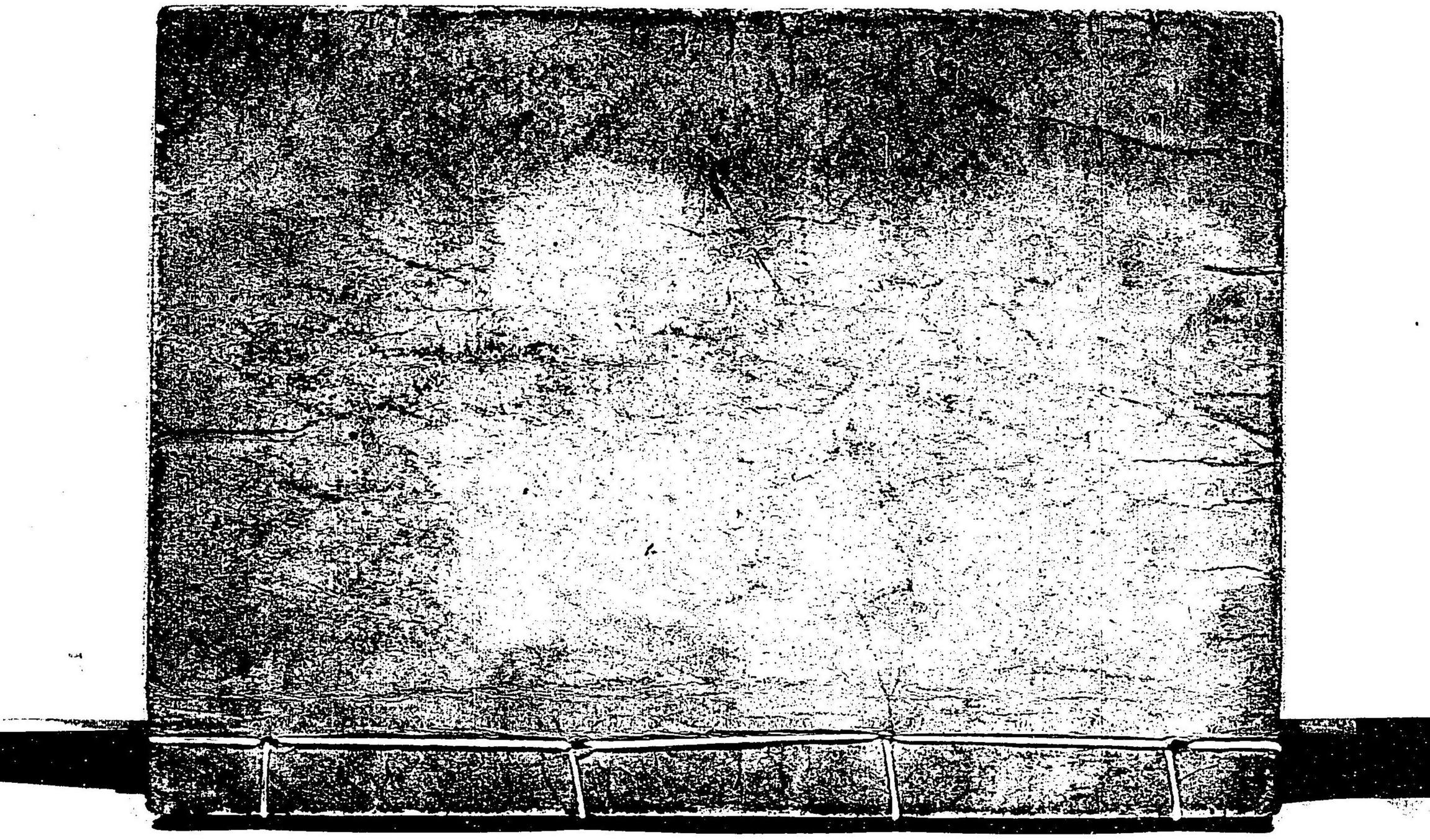
清木貞兵衛
彦根藩士にして六番隊の長なり
の折柄脱兵小山驛に押来り
せしが衆敵
の爲に
味方
一敗とな
りしが更に
屈せず奮勢
を奮ひ戰ひも
乱弾数ヶ所に當りて
討死す此時戊辰四月十七日

結城攻撃
茲に戦爭を

明治十三年四月五日御届
仝　八月出板
定價六錢

編輯人　浅草區西三筋町三拾壱番地　岡田良策
出板人　下谷區通新町六拾八番地　松本六右衛門

名譽新史
明治百人一首　仝
赤穂義士傳　仝
義烈十傑傳　仝



特59
832

大日本教育會書籍部
第四室
二
二
一
函架号冊

館
函
架
號

004439−000−3

特59−832

今昔英雄銘々伝

岡田　霞船／編

M13

ACE−0950